

東国文化自由研究レポート



研究テーマ

群馬の古墳は何を語る

提出日 2024年 8月 26日 (月)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 1組 10番

氏名 高坂 拓杜

1. 動機

僕は、3年生の頃に古墳や埴輪をきっかけに古墳時代を好きになった。古墳や博物館を巡り、埴輪をつくることもあった。いくつもの古墳や博物館を巡る中、「かみつけの里博物館」はとても印象的だった。保渡田古墳群の埴輪の並び方は、当時の様子を表していることを知ったからだ。つまり、古墳や埴輪は、その時代を物語るものだということを知ったのだ。そこで、群馬の古墳や埴輪を調べ、それらが何を語るのか考えることにした。

2. かみつけの里博物館、保渡田古墳群について

- ・ かみつけの里博物館
榛名山東南麓で出土した5世紀後半（古墳時代）の人物や動物埴輪や当時を再現した模型が展示されている考古博物館
- ・ 保渡田古墳群（国指定史跡）
八幡塚古墳、二子山古墳、薬師塚古墳の3つの前方後円墳が集積する古墳群
- ・ 八幡塚古墳
築造年代・・・5世紀後半
全長190m 全幅148m 墳丘長96m
- ・ 二子山古墳
築造年代・・・5世紀第3四半期
全長213m 全幅173m 墳丘長108m
- ・ 薬師塚古墳
築造年代・・・5世紀末～6世紀初頭
全長165m 全幅不明 墳丘長不明



3. 調査方法

- ・ 7月28日に保渡田古墳群、かみつけの里博物館、群馬県立歴史博物館、綿貫観音山古墳に行って、古墳、埴輪について調べる（ヤマト王権と群馬の結びつき、埴輪の質 等）
- ・ 埴輪の並び方の意味を本や博物館に行って調べる
- ・ 情報をまとめ、当時の群馬は他の国と何がどのように違うのか、群馬県はどのような様子だったのかを考察する
- ・ 今後に生かせることを考える

4. 予想

群馬の埴輪は質、量、共に日本一と言われている。このことから、当時の群馬は、大きな権力を持った豪族たちが集まる場所と考えた。王の身分が高いほど、大きな古墳が作られたと考えられている。このことから、群馬には大きな古墳がたくさん見られるので、大きな権力を持った豪族がいたと考えた。

5.調査

(1)保渡田古墳群での調査

①八幡塚古墳

八幡塚古墳は、とても整備がされていた印象があった。埴輪も当時のようにたくさん並べられていたので、自分が古墳時代にタイムスリップしたかのような気分になった。しっかり、石も一つ一つずれることなく丁寧に並べられており、当時の人たちは、主のために何日かけて作ったのか、どのような気持ちで作ったのかが、よく伝わってきた。また、頂上に登ることもでき、そこからの景色はとても綺麗だった。他に中島があった。

埴輪は当時と同じ並び方になるよう再現していた。何を意味しているかは、かみつけの里博物館に行って結論を出そうと思う。また、古墳の中にも入ることができた。中には立派な舟形石棺があった。



②二子山古墳

二子山古墳は、とにかく大きいという印象だ。頂上に行くのに、石の階段がたくさんあり少し登るだけでも疲れてしまった。少し草が多いように感じた。大きさでは、八幡塚古墳よりも、二子山古墳のほうが大きいのに、一見、八幡塚古墳のほうが大きく感じた。また、人も少なかった。もっと、立ち会ってもらえるような工夫も考えたい。他に中島があった。また石棺は見る事ができなかった。

この古墳は埴輪の立て直しの事例が確認された。平坦面が崩れたことにより、壊れてしまった埴輪を下に埋め、使える埴輪を並べ直し、足りない部分は新しい埴輪で補っていたことが、わかった。埋められていた埴輪が出てきたのだ。



③薬師塚古墳

薬師塚古墳は、お寺の中にあった。あまり手入れがされていなく少し草が荒れていた、という印象だ。だが、古墳時代を思い浮かばせるような心落ち着く場所だった。

お寺の影響で古墳の形が変形していた。あいにく埴輪は見れなかった。この古墳では石棺全体を見ることができた。

④八幡塚古墳と二子山古墳の共通点

○中島がある

どちらも、4ヶ所の中島が作られている。中島は、円筒埴輪がめぐらされ、椀などの土器が大量に出土した。どのような経緯で作られたかは、いまだ明らかになってない。特に次の2つの説が強くうたわれている。

a,古墳における祭祀の場

b,近親者や従者の埋葬施設（陪塚）

ここで、私はaのほうが有力だと考えた。小規模な古墳には中島がないことから、いずれも地位が高く、ヤマトと深く関係があった豪族が葬られていることが推測される。つまり、八幡塚古墳と、二子山古墳に葬られた豪族は圧倒的な権力者だったことがわかる。もしこんなにも権力を持った豪族ならば、近親者も古墳が作られるのではないかと考えた。他にも、もし、近親者が埋葬されているのなら、石棺が見つかるのではないかという疑問も湧いた。また、祭祀をしている場面は埴輪に残されるなど、貴重なことを意味していたのだと思う。このことから、私はaのほうが有力だと考える。

※左→八幡塚古墳の中島 右→二子山古墳の中島



○舟形石棺がどちらも発見されている

'舟形石棺'

- ・ヤマトの大豪族が使った長持形石棺に次ぐ格式の棺
- ・魔除けや復活を祈って内部は赤く塗られている

などという記載があった。埋葬部のあとからは、太刀、玉、鎧の破片などが出土している。



写真は八幡塚古墳の舟形石棺

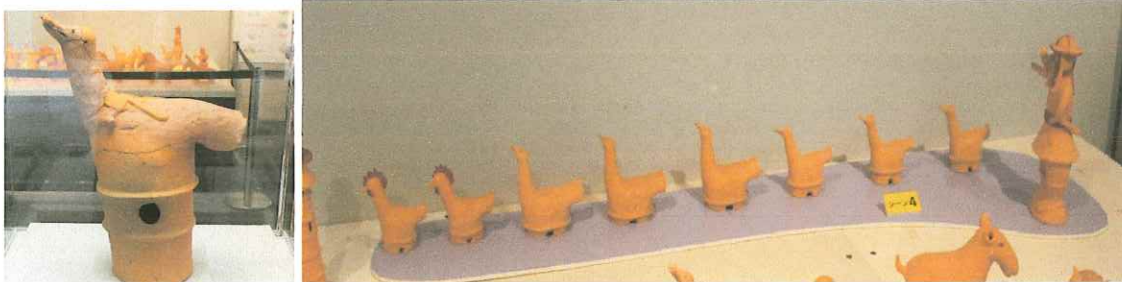


(2)かみつけの里博物館での調査

かみつけの里博物館では、たくさんの埴輪を見ることができてとても貴重な体験ができた。やはり、画像で見る埴輪と実際に見る埴輪とは全然違った。埴輪の種類や意味について分かりやすく知ることができた。古墳に囲まれている博物館でもあるが、いい感じに溶け込んでいてふんわりとした雰囲気だった。優しく教えてくださったかみつけの里博物館の方々ありがとうございました。

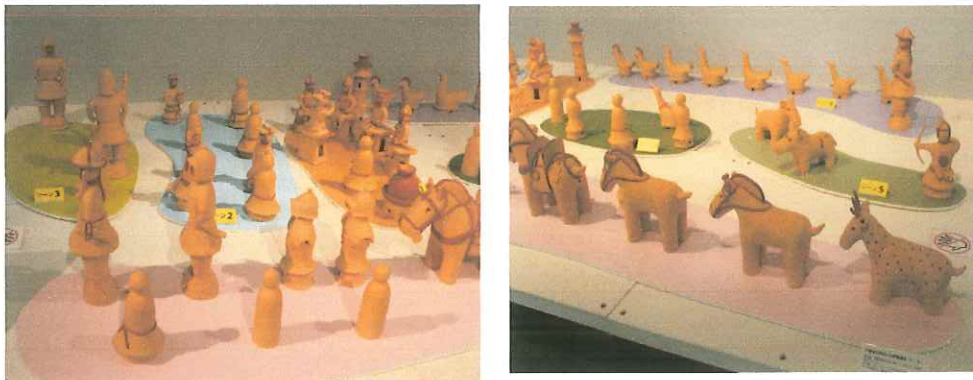
①この時代から栄えていた群馬

かみつけの里博物館をまわるなかで、魚をくわえた鳥の埴輪があった。どうやらこの埴輪には、首元に鈴がついていたらしい。資料には、上の理由からして、鵜飼いが行われていたことがわかったと記載されていた。ただ私は鵜の埴輪が鵜飼いを意味していたなんて思えなかった。まだ狩りをしていた時代。本当にせっかく捕まえた鳥を食べ物にしないのだろうか？。そう疑問に思った。今は家畜というものがある。食べごろになるまで育てることを意味する。そのように大きくなるまで、首輪をつけ育てていたのではないか、と思った。育てるうちに豪族が気に入ったから古墳にもペットのような感覚で置かれたのではないだろうか。または、豪族が鵜の料理を好んだのではないだろうか。本当に鵜飼なら、近くに大量の鵜の埴輪があったり、船形埴輪にくっつけられたりして、飾られるのではないだろうか。だが、どちらにせよ昔から知恵を働かせた工夫をして生きていたことがわかる。

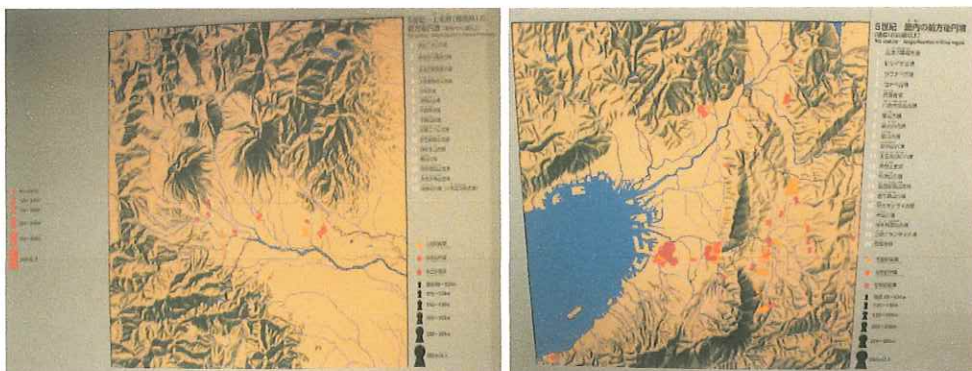


②古墳に並べられた埴輪の並びの関係

古墳に並べられている、埴輪。並べ方には意味があったのだ。そのことを決定づける理由としては、複数の埴輪で王の儀式などを再現しているからだ。当時の背景として、埴輪や飾りは、権力の象徴だったことから、王の儀式を再現していても、納得する。また、王様、巫女、武人のほか、琴弾き、狩人・犬・猪、力士、馬、盾など、様々な埴輪が必要性的を持って作られ、意味を持って配置されていると思うと、一つ一つに工夫がされていて、感動を誘われる。たくさんの埴輪が古墳においてあったということは、それだけたくさんの人を従えられる権力があったのだろう。

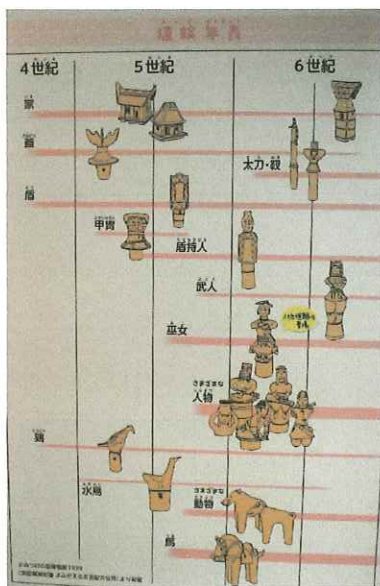


③ヤマトと群馬のつながり



これは、5世紀—上毛野（群馬）の前方後円墳を年代、大きさとともに記した表（右）と、5世紀—畿内の前方後円墳を年代、大きさとともに記した表（左）である。このことからわかるように、上毛野の墳長100m以上の前方後円墳が1番多かった時代は、5世紀後半だ。一方畿内ではというと、5世紀前半だ。上毛野と畿内では栄えていた時期が重ならない。ということは、ヤマト王権が5世紀後半に、勢力を一部上毛野に注いだということが考えられてくる。

④埴輪の変化



これは、それぞれの種類の埴輪がいつ作られ始めたかを記している。先ほど、ヤマト王権が上毛野に権力を注いだのは、5世紀後半と予想した。もしあっているならば、5世紀後半には埴輪にも何らかの変化が見られるのではないかと思います、調べてみた。

5世紀後半に登場した埴輪は盾持人埴輪を除く、人物埴輪だ。5世紀前半までは人物埴輪は作られていなかったのだ。そうすると、絶対にヤマト王権の影響だろう。人物埴輪の中でも1番最初に作られた盾持人埴輪。それほど、盾持人というのは、豪族にとって大切な役割だったことが推測できる。ただ、ヤマト王権の豪族が5世紀中世から上毛野の豪族と絡んで、盾持人埴輪の作り方をたまたま1番最初に教えただけかもしれない。

次に馬埴輪だ。当時日本に馬は生息しておらず、朝鮮から仕入れたと考えられている。このことから、上毛野は積極的にヤマトを通じて外交に参加していたことがわかる。そこから、大量の馬を上毛野にあずけ、育てさせたのだろう。馬を育てるのが上手い人がたくさんいたのだろうか。たくさんいたということは、やはり上毛野の豪族は圧倒的な権力を持っていたのだろう。他にも、様々な動物が作られ始めた。



(3)群馬県立歴史博物館での調査

国宝の埴輪も見れて、とてもワクワクした博物館だった。優しく対応してくださった歴史博物館の方々ありがとうございました。

ここでは、なぜヤマト王権は上毛野に権力を与えたのかを調べる。予想は、畿内だけでは政治が不安定だったので第二の政治場所を作りたかったからだと思う。

①三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡は、ヤマト王権が魏王朝から独占的に入手し、同盟関係を結んだ地方の有力者に配布したという説がある。だとしたら、ヤマト王権と同盟関係を結んでいた地方の豪族が住んでいた場所は上毛野が日本で1番北にあることがわかった。群馬より北の都道府県は一つも三角縁神獸鏡がみつかっていないのだ。見つかっていないというのは、ヤマト王権と関係があるものがないということ。ヤマト王権の勢力が群馬より北には広がっていなかったことがわかるとなると、蝦夷が存在していたのかもしれない。しかも、上毛野は13枚も保有しており、かなり多いことがわかる。

②上毛野氏の実績

上毛野氏とは、ヤマトの豪族と考えられている人物。祖先伝承を含む上毛野氏に関する記事が『日本書紀』にはたくさん記されているという。

6～7世紀にかけて、上毛野氏が中央政府官人として、蝦夷征討や朝鮮経営など軍事的な役割を担い、東国政策において特別な地位にあった。上毛野氏はヤマト王権から認められるほど優秀な豪族だった事がわかる。また、上の上毛野氏の功績から、蝦夷が存在していたことが確実となった。もしかしたら上毛野は、ヤマト王権がさらに勢力を広げるための重要な拠点だったのかもしれない。そして、この国の指導者は、上毛野氏だったと考えられてくる。

③馬埴輪大量の裏側

群馬は馬埴輪の出土数が異様に多い。「HANI-本」によると、山の河岸段丘などの平坦地は馬の飼育に適しているかららしい。奈良と群馬の地形の違いを比べてみるとあることがわかった。奈良は山地が多いのに対して、群馬は丘陵地が多い。群馬のほうがヤマト王権の本部である奈良よりも、群馬のほうが馬を育てやすかったのだ。そこで私は考えた。だからこそヤマト王権は群馬に馬を預けたのではないだろうか。朝鮮からしか手に入らない馬。すごく貴重だった。だけど、ヤマト王権の手元では育てられない。だから、優秀な豪族（上毛野氏）がいて、なおかつ育てやすい地形の上毛野に馬を預け育てさせた。このような出来事があり、群馬は馬埴輪が多く出土しているのではないかと私は思った。また、馬埴輪だけでなく、馬子だと推測される埴輪もたくさん出土したという。これは私の考察の決め手ではないだろうか。もし、当時のことを古墳に眠っている豪族に思い出させるという目的もあり、古墳に埴輪を並べているのなら、馬子が出たということは、馬を育てていたことは確実だろう。

ただ、馬を育てるには技術が必要だ。きっと朝鮮からの渡来人に教えてもらっていたのだろう。そう考えると、上毛野はかなり外交に参加していたことがわかる。

(4)綿貫観音山古墳での調査

綿貫観音山古墳はとても広々としていて、古墳が堂々と立っているようなそんな雰囲気古墳だった。とても手入れがされていて、学習センターの方にも話を聞くことができ、とても良い経験となった。優しく対応してくださった学習センターの方、ありがとうございました。

築造年代・・・6世紀後半

全長185m 全幅143m 墳丘長97m



①古墳から出た副葬品

綿貫観音山古墳から出た副葬品は、銅鏡・銅水瓶・金銅馬具・装身具・大刀・甲冑・土器など豊富なものだ。中国大陸・朝鮮半島とつながりが深いものがいくつもあった。このことからこの古墳に葬られている豪族も積極的に中国・朝鮮と交流をはかっていたことがわかる。これらが見つかった場所はいずれも古墳の上ではなく、石室から見つかったとされている。また、ヤマト王権から認められた証と考えられている三角縁神獣鏡も見つかっている。ヤマト王権との関係も強く、外国との関係も強く、多方面で活躍した豪族と考えられる。また、この6世紀後半という時代は、中国大陸で南朝と北朝で対立が続いたり、朝鮮半島でも、高句麗・百済・新羅・加耶の諸国が争いを繰り広げてたりした激動の時代だ。その中でも正しい判断をして外国から副葬品を手に入れ、倭を導いた存在なのだから、さぞ社会的地位が高かったのだろう。中国大陸、朝鮮半島と倭をつなぐ架け橋だったに違いないと思う。

②埴輪の質

埴輪の国宝の多くは綿貫観音山古墳から出土したものだ。どの埴輪も飾りが細かく、きれいなものだ。馬埴輪にも馬具がつけられ、華やかだったことも判明している。特に数も多い。二段に築かれた墳丘の平坦な場所には600本を超えるバリエーション豊かな埴輪が並べられた。また、綿貫観音山古墳からしか出土していない埴輪がある。それは「三人童女」。国宝にもなっている。このように他に見ない埴輪が出土している。綿貫観音山古墳に眠る豪族に仕えていた埴輪作りが全国的に見てもプロだったと考えられる。グレードの高い人々もたくさん従えられるほどの権力者だったと私は考える。

③横穴式石室

綿貫観音山古墳の石室は横穴式石室だ。全長は12.6m。遺体を納める玄室は全長8.2m、幅3.8mで全国最大級だ。石室の壁は榛名山の噴火によってもたらされた石材で、ブロック状に加工したものだ。最も重いものでは22tあり、約15km離れた場所から運んだ。この時代はまだ自動車などなかったから、手で持ち運んできたのだろう。1つの石を持つのにどれだけの人数がかかったのだろうか。私は、15km歩くだけで疲れてしまうのに、それも22tも重いものを持ちながら移動するなんて考えられない。どれだけ体が強くて、主への思いが強かったのだろうか。すぐに作ることができたのだろうか、すごく謎だ。渡来人の進んだ技術を取り入れることによって、ある程度早く作業を終えたのだろうか、何年かかったのだろうか。はたして22tを持ち上げ移動することはできたのだろうか。大事に育てた馬を使って運んだのではないかと私は思う。



実際に石室に入ることができた。とても大きかった。私が立ち上がっても全然天井にはぶつからなかった。また、涼しかった。ここに古代の豪族が眠っているのだと思うと、神秘的に感じた。石室を作った人たちの努力が伝わってきた。

④盗掘について

この古墳は盗掘されていなかった。盗掘されなかった理由にはたくさんの説がある。例えば、たまたまみつからなかった説、天井石の一部が崩れていたから入れなかった説、などいろいろな説があるが私はこう思う。ヤマト王権に守られていたから。定期的にこの古墳を手入れをしていたヤマト王権。天皇にも守られていたとされるこの古墳。だから、庶民やちょっとした豪族が手を出すことが許されなかったのではないだろうか。

6. 結論

これまで調べてきた中で、当時の群馬とはどのような様子だったのか、古墳は何を物語っているのかを考察する。まず、はじめに予想した「大きな権力を持った豪族がいた」という予想はあたっていたと思う。正式にはヤマト王権と深く繋がりがあった豪族だ。その理由は、ヤマト王権から認められた証と考えられている三角縁獣鏡が群馬県から多く出土したり、全国最大級の玄室があったりしたからだ。だから、上毛野の豪族に力を与えて、領土拡大に貢献させたのではないだろうか。私にはヤマト王権が勢力を与えたのにはもう1つ理由があると考えている。それは、防衛拠点にしたかったからではないだろうか。当時、蝦夷が存在したことは事実となっている。その蝦夷にヤマト王権がせめられるのをおそれ、1番北の上毛野に力を与えたのではないだろうか。こう考えるのには理由がある。それは、上毛野氏が蝦夷討伐に参加しているという記事が残されているからだ。

ではなぜヤマト王権は三角縁獣鏡を預け、上毛野を勢力を持った地域にしたのか。それは、ヤマト王権の勢力を伸ばしたかったからではないだろうか。当時、群馬より北には勢力が広がっていなかったことがこの調査でわかった。ヤマト王権は更に勢力を伸ばしたいはずだ。そう考えると、1番北にある場所を勢力拡大の拠点としたいと考えるのが普通だ。ヤマト王権の1番北、それは上毛野だったのだ。上のように考えれば、すべて辻褃が合う。このことから、私はヤマト王権にとって重要な軍事的拠点だったと考えた。

当時の群馬の背景には、もう1つ大きな点があると思う。それは、外交を積極的に行っていたことだ。群馬の中でも特に大きい保渡田古墳群、綿貫観音山古墳に行ったわけだが、どちらも、中国大陸・朝鮮半島と同じようなものが出土している事がわかった。つまり、外国と外交していたことがわかる。このことから、上毛野は活発に外交を行っていたと考えた。

つまり、「群馬の古墳は、ヤマト王権の大事な軍事拠点で、活発に外交していたことを物語っている。」

と私は考えた。

7. これからは活かそうなこと

今回の調査で、ヤマト王権から馬を育てるように言われていたと考察したが、これが本当でも、本当じゃないにせよ、群馬の地形は馬を育てるのにとても適していることがわかった。もし、馬を育てたら産業で成功すると私は思った。群馬の市町村は発展しつつも、自然をしっかりと残している。だからこそ、群馬は馬を育てることに適していると私は思った。その馬を産業として活用すれば、まさに「馬が群れる県、群馬県」という強いインパクトを与えることができるのではないだろうか。

また、もっと古墳、埴輪をアピールしたい。そうすることにより、観光客が増え、もっと群馬は発展していくと私は思う。国宝が1番出土している都道府県は群馬なのだから、もっと誇りを持ち、後世に伝えていくべきだと思う。群馬が過去に日本の中で重要な役割を担ったことは疑う余地がない事実である。つまり、地理的条件や気候などを考慮してもこれから先、群馬が再び日本の重要な役割を担える可能性があることを期待せずにはいられない。群馬が歴史的に見ても、価値の高い場所であることを古墳、埴輪をアピールすることで、世の中に伝えていきたい。

群馬の古墳と埴輪は今の私達に向けて、メッセージを届けている。きっと今につながるように古代の豪族達は私達に何かを伝えてくれている。それを無駄にしないように、今後活かしていきたい。

8.感想

これまで私は当時の群馬はどのような様子だったのかを調べてきた。やはり、当時のことを知るには、古墳や埴輪を探究することが一番の近道だということがわかった。今回調べたこの知識は、一生ものとなるだろう。とても貴重な体験ができたと思う。本当に楽しかった。これからも古墳、博物館めぐりを続けていきたい。

なぜ群馬は古墳、埴輪が多いのかの謎を自分なりに考えることができ、また1つ成長できたと思う。これからもっと多くの人に群馬の古墳、埴輪を知ってもらいたい。そして、私はこれからもっと多くの人に、魅力を伝えたい。一人でも多くの人に知ってもらえるように私も頑張りたい。多くの人に知ってもらうことが、研究（調査）の最終ミッションだと思う。古墳、埴輪はいまだ未解明なところがたくさんある。どんな考えも間違いだし、どんな答えでもあっている。自分なりの意見を出すことが面白いのだ。何かを探究するときには、ぜひ自分が納得する理由を見つけられるまで、探究してほしい。そして、私と一緒にこの面白さ、楽しさ、素晴らしい今を生きている誇りを後世に伝えていってほしい。また、調査というのは、いずれも一人でできるものではない。ここまで私の研究を応援してくれた人々に感謝をしなければならないと思う。私が綿貫観音山古墳の石室に入れたのも、綿貫観音山古墳の学習センターの方が、営業時間外なのに、石室を開けてくださったから、みることもできたのだ。見終わった後も、丁寧に説明をしてくださった。本当に感謝してもしきれない。優しく対応してくださった、かみつけの里博物館の皆様、群馬歴史博物館の皆様、綿貫観音山古墳の学習センターの方、そして、つきあってくれた父、祖父に感謝をしたい。私はこの東国文化の調査を進める中で、「優しさ」を改めて感じた。どれだけ大切なものかを。今後何かを行うときは、周りへの感謝を忘れずに行っていきたい。

東国文化の調査は、東国についての知識がつくだけでなく、「優しさ」も今一度考えさせられる調査になった。この素晴らしい調査を私は一生忘れず、大切に生きていきたい。東国文化最高！

9.参考文献

～文献・資料～

- ・松島榮治『東国文化副読本』 群馬県 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信委員会
2021年4月発行
- ・右島和夫、若狭徹『HANI-本』 群馬県 2020年10月発行
p.6～8 p.72
- ・松島榮治『東国文化副読本』 群馬県 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信委員会
<https://hani-gunma.jp/2021gunmatougoku/book/index.html#page=2>
閲覧日：2024年8月18日
- ・『高崎市観光情報サイト』
<https://www.city.takasaki.gunma.jp/site/sightseeing/>
閲覧日：2024年8月18日
- ・『奈良県』
<https://www.pref.nara.jp/>
閲覧日：2024年8月18日
- ・『関東地方整備局』
<https://www.ktr.mlit.go.jp/>
閲覧日：2024年8月18日

かみつけの里博物館の方々、群馬県立歴史博物館の方々、渡貫観音山古墳学習センターの方、協力してくださったすべての方々、本当にありがとうございました。